

在外教育施設におけるキャリア教育の実践

前テヘラン日本人学校 教諭

岡山県備前市立伊里中学校 教諭 大河原 崇 視

キーワード：キャリア教育，職場体験学習，入試対策，ビジネスマナー

1. イラン・イスラム共和国およびテヘラン日本人学校の概要

(1) ベールに包まれた，不思議に満ちた国

私が3年間駐在したイラン・イスラム共和国（Islamic Republic of IRAN，以下イラン）は，日本から北西に約7,500km離れた中東地域に位置している。国土面積は約165万平方キロメートル（日本の約4.5倍）。そのほとんどが乾燥帯に属し，礫砂漠，岩石砂漠が広がっているが，北部カスピ海沿岸地域は，四季の変化に富んだ温帯に属し，日本の昭和初期のような水田風景が広がっている。人口は7,500万人ほどで，首都テヘランにそのおよそ15%が居住している。他の中東諸国と同じように，イスラム教徒が国民の9割以上を占めており，特に戒律が厳しいとされているシーア派を信仰している。道行く女性は，頭に頭巾のようなもの（ヘジャーブ）をかぶり，夏でも長袖，ロングコートが必需品である。これらのルール（イスラミック・コード）は，私たち外国人にも適用される。工業の中心は石油関連産業であるが，自動車，鉄鋼などの重化学工業，ペルシア絨毯に代表される軽工業も中東地域有数の規模である。しかし，近年，イランの核開発疑惑に端を発した，欧米諸国による経済制裁によって国内経済は疲弊し，物価の急激な上昇に伴い，国民生活は決して豊かとはいえない。2013年6月に，それまでの保守強硬派のアフマディネジャド大統領に代わってロウハニ師が選挙で選ばれ，欧米との協調路線を模索している。

(2) テヘラン日本人学校

テヘラン日本人学校は，イランの首都テヘラン市北部のジョルダン地区に位置している。校地面積は狭いが，専用の運動場やプール，理科室や家庭科室などの特別教室を備えた，小さいながらも使い勝手の良い校舎で子どもたちは毎日勉学に励んでいる。上記で述べたように，日本も含めた西側諸国による経済制裁により，資金や物資の移動が厳しく制限されるようになったため，駐在員を減らす企業等が相次ぎ，私が赴任した2011年度に比べ，児童生徒数はおよそ4分の1に激減した。帰任直前の2014年3月現在の在籍児童生徒数は10名であった。しかし，「世界一人数の少ない日本人学校」が「世界一の学力向上」を目指して教師と子ども，保護者一体となって学校づくりに取り組んできた。今回は，数多くの取り組みの中から，派遣2年目に取り組んだ，中学部におけるキャリア教育の実践について紹介したい。

2. 在外教育施設の特長

在外教育施設は，さまざまな面で日本の学校と比べて特殊な環境に置かれている。教育活動における安全性の担保の問題，2～3年ごとに入れ替わり，人数的にも限られた文部科学省からの派遣教員を中心としたスタッフによる引き継ぎ等の問題，教員と同じように入れ替わりの多い子どもたちへの系統的な指導の問題，言葉の違いによるコミュニケーションの難しさの問題，複式学級の問題，校舎や教室，教材・教具等の整備の不十分さの問題，文化や考え方，時間間隔の違いによる問題など，数えあげればきりが無い。しかし，それらの問題点や課題を補って余りある魅力的な教育活動ができるのが，在外教育施設最大の利点であると日々考えてきた。

この利点を生かすため，当地の文化や習慣について話を聞いたり，祭りやイベントなどに参加し，体験したりすることで，教師と子どもがともにその国についての知識を深め，そこで得た知識や情報や考え方を共有したり，発信したりする異文化理解の授業実践が各地で行われてきたことと思う。それは，在外教育施設ならではの

の活動であり、国際的視野に立った考え方を身につけた子どもたちを育成することにつながると確信している。

また、私は、在外教育施設の別の利点として、出身地や生育環境、価値観がそれぞれ異なる子どもたちが一堂に学習し、意見を戦わせることにより、また、全国各地より集まった教師や保護者、日本人会の大人たちとのふれあいの中で、自分にはない考え方や価値観を共有したり、また、大げさかもしれないが、人の生き方に影響を与えられる可能性が生まれたりするのではないかと思ってきた。

3. テヘラン日本人学校の特殊性とそこから見つけた方向性

テヘラン日本人学校は、前述したように全校児童生徒数が10名程度の在外教育施設であった。このような場合、小学部は単学年の学級編制が可能であったとしても、中学部は在籍生徒数が少ないため、中1から中3までの複式学級が編制されることが多いのではないだろうか。同じ教室の中で中1から中3までが机を並べ、朝夕の短学活や道徳、学級活動、総合的な学習の時間の授業を受ける。日本ではほとんど目にすることがない状況が、テヘランの日常だ。道徳や学級活動の授業を行う場合、どの学年に焦点を当てた授業をすればよいか悩んだ。中1に合わせれば、中3は物足りなさを感じるし、逆の場合は、中1に理解しづらい場面が生じる。

また、駐在員の多くは、2年ないし3年で転勤するため、中学部における3学年複式学級の場合、子女一人ひとりに対して、3年間を見通した計画的・系統的な教育実践がしにくい。中1の1学期ごろに転校して来れば、中学校時代のほとんどを在外教育施設で過ごすことになるので問題点は少ないが、中2まで海外で暮らし、中3から日本の中学校に戻る場合、日本の中学生が中2までに行っている内容は少なくとも実施しておかなければならない。しかし、その生徒の事情だけに配慮したカリキュラムを組むと、小学校から進級したばかりの中1生徒にとって、ハードルが高いこととなる。

教科指導の内容は、日本と在外教育施設で学校による差はあまり見られないが、道徳や学級活動、総合的な学習の時間などは、学校ごとに独自のカリキュラムが策定・実施されていることが多いため、実施内容や形態には、特に注意を払わなければならない。

一方、テヘラン日本人学校に限って言えば、運動会やPTA主催の夏まつりなどに、大使や各駐在企業の社長の方々をはじめとする日本人会員の方々が多数参加し、子どもたちとともに汗を流し競技を楽しむ、という交流が活発に行われていたという伝統がある。また、テヘラン日本人会の行事にも子どもたちが参加し、ソフトボールやテニス大会などでの大人同士の真剣勝負を目の前で見て、応援する姿がごく当たり前のように見られている。このように、大人と子どもの交流が自然にでき、学校行事に大勢の日本人会員が積極的に関わる土壌があるテヘランであれば、私の思い描いていた、地域を巻き込んだ学習活動が展開できるのではないかと考えた。

私はテヘラン日本人学校赴任前、岡山県の中学校で12年間、教師を務めてきた。採用数年目ごろから、中学校における「望ましい職業観」を育成することの必要性が叫ばれるようになり、将来の職業選択を見据えた、発達段階に応じた系統的なキャリア教育の実施について、先進校の一つとして研究を行った。私が主に取り組んできたのは、中学3年間を見通した授業実践であったが、それを、内容はできるだけそのままに、時数的なアレンジを施したり、まとめ方を工夫したりしながら、1年をかけて中1から中3までの全生徒を対象にしたキャリア教育という形で実施した。

4. テヘラン日本人学校中学部におけるキャリア教育の取組

(1) 目的ならびに実施概要

- ①目的 ・ 職場見学や体験など、実際の職場に触れることを通して、勤労の尊さや意義を理解させるとともに、将来の進路決定に向けての意欲を高めさせる。
- ・ 職場の人々との交流を通して、社会人としての良識や教養を身につけさせるとともに、自らの生き方、あり方を考えさせる。
- ・ 中学生が地域に向くことを通して、中学校教育に対する日本人会の関心を高め、日本人会や家庭、

学校の連携を深める。

②実施概要

月	具体的活動内容
4月	進路ガイダンス，職業を知る（職業分類），先人の行き方に学ぶ（プロジェクトX）
5月	職業調べ（興味のある職業について図書資料等から調査），職業調べ発表会
6月	活動の基礎となる項目の学習（電話の対応，手紙・メールの書き方，質問の考え方） 職場訪問の依頼（代表生徒が電話にて訪問のアポイントメントをとる）
7月	職場訪問（当時のテヘラン日本人会会長の勤務先を訪問，仕事内容の説明を聞く） お礼状作成，活動報告レポート作成
9月	職場体験の計画づくり（電話によるアポイントメント，依頼メール作成，訪問先の情報収集など）
10月	ビジネスマナー講座 職場体験学習（1日間）
11月	お礼状，活動報告書作成
12月	高校入試・入社試験を見据えて（面接，集団討論，自己PRの練習）
1月	面接，集団討論，自己PR実践（放課後を使い，隔日で実施）
2月	進路学習発表会（第2回学校公開で保護者，日本人会員に公開）

(2) 職場訪問

職場体験学習の前段階として，7月に，学校からほど近いA社（総合商社）を訪問し，会社の業務の説明や仕事をする上での苦勞，やりがいなどについて担当者より話を聞いた。実際に仕事をしている現場を自分の目で見ることで，また，直接話を聞き，質問することでコミュニケーション能力を高めることを目的として実施した。生徒たちは，会社説明の映像資料を視聴し，オフィスに掲げられた活動地域を示した地図などから，イランにおけるA社の事業展開について説明を受けた。また，多くの品目を扱い，それらを日本に紹介することで日本人の利益に貢献していることや，日本でつくられたものをイランに売り込むことで，イランの発展にも貢献していることなどの話を伺った。わずか1時間程度の訪問ではあったが，教室では学べないことを多く吸収し，「働くこと」をより身近に感じることができた。この活動では，事前に電話で依頼をしたり，質問を考えたりする活動にも取り組み，その後の活動の基礎となる項目について演習をすることもできた。



企業の方の話に熱心に耳を傾ける中学部の生徒たち

(3) ビジネスマナー講座

職場体験学習を2週間後に控えた10月初旬，テヘランで商社に勤務している方を講師に招き，ビジネスの世界で大切な事柄について，自らの体験談を交えてお話しいただいた。職場体験学習時に必要となる，あいさつや言葉遣いなどの礼儀作法はもちろんのこと，仕事をしていて失敗したときの対処法や，海外で外国人を相手に仕事をするときに苦勞したことなど，生き方全般にわたる，大変示唆に富んだ話となった。生徒にとって特に印象的だったのは，「人は誰でも失敗する」ことに気づけたことではなかっただろうか。どんな人でも多少の失敗を経験しており，その体験談や，その失敗を繰り返さないために次にどんなことを意識したり注意したりしたかを直

接聞くことができたことにより、職場体験に臨むにあたって、心の余裕ができ、また、問題に直面した時の対処法を知ることができた。

(4) 職場体験学習

将来就きたいと考えている業種の仕事を体験すること、また、一人の従業員として出勤から退勤までをともに過ごすことで、働く上での様々な人との出会いを経験し、コミュニケーション能力を磨くことなどを目的として行った。テヘラン日本人会の全面的な協力を得て、6人が6つの事業所に分かれ、それぞれ体験活動を行った。ある生徒は教師になりたいという夢をもち、テヘラン日本語補習授業校で授業を行った。また、別の生徒は自動車整備士になるため、B社の自動車修理工場（日本資本のイラン人が経営する会社）で整備の仕事を経験した。この他にも、在イラン日本国大使館、国際協力機構（JICA）イラン事務所、電機機器メーカーのC社、イランエアーにお世話になった。わずか1日の体験活動ではあったが、学校から飛び出して、それぞれの夢につながる仕事に従事できたことは生徒にとってまたとない財産になったし、それを可能にしてくれた各事業所担当者のきめ細やかな対応にあらためて感謝したい。



イラン人スタッフの指導のもと、活動に取り組む生徒

(5) 上級学校入試に向けて

職場体験学習が終わった11月以降、3年生を中心に据えた学習を行った。すなわち、高校入試に直結する、面接や集団討論、自己PR活動に備えた学習である。1年生には少々荷が重い活動ではあったが、いずれ経験することとして前向きにとらえさせた。本校には、3年生が1名しか在籍しておらず、同級生で集団面接や討論をすることができないため、6名全員での学習を基本として行った。

面接で大切なことは、その場限りの付け焼刃の対応ではなく、日ごろから言葉遣いや、礼法、あいさつ等に留意し、いつでもどこであっても適切な対応ができる能力である。そのため、校長を含めた全教員を面接官と想定し、学校生活のあらゆる場面を面接の機会ととらえさせた。

集団討論では、海外に長期間生活していることで、日本の中学校・中学生の実態が理解しにくい面がある（例えば、携帯電話に関することや、ニュースなどからの出題など）ことを踏まえ、もしそのようなテーマが出題された場合の対応について説明した。

5. 成果と課題

成果としては次の3点があげられる。1つ目は、子どもたちが確固たる目的をもって、主体的に準備や体験活動、報告書作成などに取り組むことができたことである。2つ目は、色々な職業についての知識を深め、また、体験することで興味や関心を抱き、自分の適性についても知ることができたことである。3つ目は、同じイランで生活している大人が、日本や日本人のため、世界のために日々努力していることに気がつくことができたことである。

一方の課題としては、2つあげられる。1つ目は、職場体験学習後の面接や集団討論などの活動でも、外部講師の協力を仰ぐことができたのではないかということである。各企業のトップの方々がどのような人材を求めているか、また、そのためには中学校時代に何が必要で、どんな意識をもっておくことが大切かを話していただくことで、特に中1、中2生徒にとってはその後の学校生活の指針となったはずである。2つ目は、この活動を今後、どのように教育課程に位置づけていくかである。お世話になった各事業所の方への事後アンケートでは、「(中学

生にとって) ととてもためになる活動なので、今後も続けていくべきであるし、そのための協力は惜しまない」といった意見が多く寄せられた。一方で、「毎年実施するとなると負担が大きい面もあるので、3年に1度など、定期的なスパンで実施すべきではないか」といった意見もあった。平成26年度現在、中学部の生徒数は1名。その生徒は、1年次にこの活動を経験している。今後、イランを取り巻く経済状況が好転し、児童生徒数が増加してきた場合、どのようにしていくべきなのか。教員の異動も頻繁に行われるため、引き継ぎに際して、さらに新しい視点も加えながら魅力的な教育活動になるよう拡大・発展していったほしいと願っている。